

ムーブ叢書 ジェンダー白書 9

アクティブシニアが日本を変える



- 山田昌弘、足立清史、溝田弘美、倉田操、古久保俊嗣、遊間和子、野内類、堀池喜一郎、中原弘子、山本貴代、関根千佳、香山リカ、辻哲夫 著
- 北九州市立男女共同参画センター 編
- 明石書店
- 2013年初版
- 1,600円(税別)

「超高齢社会のシステムモデルを示すことが日本の役割」(辻哲夫)である。それがどんなモデルかを、辻氏を含む13人の著者が、多様な角度から示した。その中から、気に入ったセリフをいくつか拾い上げる。

「第2の人生の場合は、自分が何者であるかを一から築き上げる必要がある」(山田昌弘)。「寿命でいえば、動物園の動物は野生の動物よりも環境的に恵まれているが、自由度が低いので野生動物よりも寿命が圧倒的に短い」(溝田弘美)。ブロードウェイを目指さないかという提案に、「面白いやないですか、やりましょう」(倉田操)。「夫の知らないところで、恋する消費はアクティブマダムをますます艶やかにしていく」(山本貴代)。

女性はアクティブだが、問題は男性。「若者から見て年金受給シニアが動かないのはもったいない」(堀池喜一郎)。「祖父層が育児参加に手を挙げれば、祖母層は2日に一度の参加ですむ。婿側の祖父層が参加すれば、週1日の参加ですむ」(古久保俊嗣)。妻が社会参加していると、「自分の口は自分で養う自立した父

ちゃんに成長」(中原弘子)する。

それはしんどいなというシニアには、「アクティブにしない自由も認められるべきではなからうか」(香山リカ)。さて、いかが?

ほった つとむ
堀田 力 (公益財団法人さわやか福祉財団理事長)

アクティブシニア

アクティブに生きたい人はアクティブに生きるのが幸せ。それは年寄りだって同じなのである。

だから、若い人は「年寄りのくせに」と言わない。経営者は、定年になっても役に立つ人は辞めさせない。地域の人は、お年寄りにできることがあれば、全部やってみよう。やってくれたらいっぱい感謝して、一緒に遊ぶ。政治家は、年齢制限の法律は廃止する。そしてご自分は、国民の声が聞けなくなったら、耳は遠くなくても引退する。

年寄りは、最後まで言いたいことを言う。口がダメでも眼で言いましょ。



- サビーネ・フリーシュトゥック、アン・ウォルソール 編著
- 長野ひろ子 監訳
- 内田雅克、長野麻紀子、粟倉大輔 訳
- 明石書店
- 2013年初版
- 3,800円(税別)

日本人の「男らしさ」
—サムライからオタクまで「男性性」の変遷を追う—

このタイトルを見て不思議に思う人も少なくないだろう。サムライはわかるが、なぜオタクが「男らしさ」研究に登場するのかと。確かに、身体能力の高さや仕事の優秀さなどで男らしさを測るなら、オタクは男らしくないかもしれない。しかし見方を変えれば、いまやオタクは、アニメやゲームといった世界が目指すクール・ジャパン文化の先導者であり、国内はおろか海外でも、日本の男性のあり方(男性性)のサブタイプとして認められている。

このように本書では、江戸期の武士や戦前期の兵士など、その時々で理想とされてきた男性たちだけでなく、ホームレスやオタクといった現代社会で周縁化された男性たちの生き様にも目を向け、それらを多角的に検討している。さらに考察の射程は、自衛隊員が宿命的に抱える男らしさの悩みや、ロボット開発者のジェンダー観にまで及ぶ。

本書が一貫して示すのは、「男らしさ」の意味は決して永遠不変ではなく、様々な集団が自分たちの地位や生活スタイルの正当性を競い合う中で不断に再定

義され、時と共に変化しうることだ。11名の欧米の研究者たちの斬新な視点を通して、読者は、日本人の「男らしさ」の奥深さを再発見するに違いない。

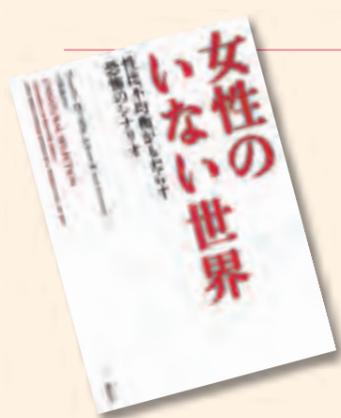
たがふとし
多賀 太 (関西大学文学部教授)

覇権的男性性

男性の生き方や置かれた境遇は、人によって異なっている。しかも、あるタイプの男性のあり方が賞賛される一方で、他のタイプはそれほど注目されなかったり蔑まれたりする。こうしたなかで、男性優位社会の正当化に寄与しつつ人々から賞賛される男性のあり方を、社会学者のR.コンネルは「覇権的男性性」と名づけた。女性が男性に対して求める「男らしさ」がこの覇権的男性性に相当する場合、女性もまた男性優位社会の正当化に荷担していることになる。「覇権的男性性」は、いまや世界各国で批判的男性性研究のキーワードとなっている。

女性のいない世界

—性比不均衡がもたらす恐怖のシナリオ—



- マーラ・ヴィステンダール 著
大田直子 訳
- 講談社
- 2012年初版
- 2,200円(税別)

人口統計学者は、世界のいくつかの地域における出生性比のアンバランスに気づいた。東アジア(中国、台湾、シンガポール、ベトナム)、南アジア(インド、パキスタン)、西アジア(アルメニア、アゼルバイジャン、グルジア)などで明らかに男児が増えている。その陰で行われる超音波胎児性別診断や頻繁な中絶手術の実態、男女産み分けが医師や医療機器メーカーのビジネスチャンスになり道徳をも退廃させている状況、「ネイチャー』『サイエンス』等の学術誌において展開される学識者の議論などがレポートされている。

さらに本書は、その根底に英米を中心とする国際機関の主導した人口抑制策が深く関与したことを解き明かし、経済発展に伴う出生率減減と同時に男女産み分けが拡大するようになったと説く。現代の日本では懐疑的に思われるかもしれないが、詳細に描写される生々しい実例が、絵空事ではない現実とゆがんだ未来の実現性を読者に突きつける。戦後の日本においても然りであった。総則冒頭に「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」と謳われた「優生保護法」は、米国の関与により制定されたのであり、後のブッシュ大統領がこの過去の功績を評価した事実もある。

性比アンバランスは以前から差し迫っていたにも関わらず、無視し続けられ、現代では簡単に無くならない根深い問題に膨張してしまっただけといえよう。この社会病理に対する処方箋は何か? 科学技術の発達と生命倫理の関係に加え、女性に対する文化・社会・政治の在り方など、国家を超えて考えるべき問題を読者に訴える良質のノンフィクションである。

いけだ ともこ
池田 智子 (産業医科大学産業保健学部学部長)

出生性比

女子出生数を100とするときの男子出生数の比として表わされる。人間の出生性比は地域、時代にかかわらずおおむね105前後になり、104から106であれば自然な許容範囲と言われている。しかし近年、台湾、韓国、シンガポールで109、インドで112、中国で120という著しい人口男性化が起こっている。本書で紹介されているパリ人口開発研究所のクリストフ・ギルモトの研究によると、もしこの過去数十年間自然な性比が維持されていたとしたら、アジア大陸だけでもあと1億6300万人、つまり日本の総人口よりも多い数の女性がいた計算になる。

女傑

—寺坂カタエが往く。—



- 市川喜男 著
- (財)国際東アジア研究センター内「女傑」編集委員会
- 2012年初版
- 1,500円(税別)

楽しそうに生きている。——。苦しい経験もユーモアたっぷりに話し、豪快に笑い飛ばす。読売新聞(西部本社版)の九州・山口総合面で5月3日付から、公立中学校校長などを務めた寺坂カタエさんの連載を始めるに当たり、何度かにわたってカタエさん取材した折り、そんな印象を受けた。女性の社会進出が難しかった戦前、戦後を生き、あらゆる不条理に真っ向からぶつかった。91歳になっても、そのバイタリティーは衰えていない。

旧戸畑、八幡市はかつて、製鉄などの工場群が広がり、仕事を求めて全国から男たちが集まる男性中心の社会だった。カタエさんの父親も官営八幡製鉄所の職工として、大分から移り住んだ。本書では、そんな男社会で、きつぱのいいカタエさんが、次々と女性の権利を勝ち取る様子が、すがすがしい筆致で描かれている。

5市合併後、教組も旧5支部が合体して北九州市教職員組合に統一されたが、青年部長は専従なのに婦人部長が専従でないことに抗議して専従にさせた。しかし、組合専従になるものがおらず、「もののはすみで」自身が初代婦人部長に選出されると、校長会に乗り込ん

で、生理休暇の充実などを訴えたという。1985年のナイロビ国連世界女性会議に手弁当で参加した時のエピソードも盛り込まれている。

今でも女性団体を鼓舞し、様々な市民活動に奔走する。「後悔はしたくない」という生き様は、最近「草食系」と揶揄される男たちにとっても、見習うところが多い。

なかよし よう
中西 瑛 (読売新聞記者)

男女格差

「女性は家庭を守るべき」という固定観念は、今も日本社会に深く根ざし、世界的に見ても、男女間の格差は正が進んでいない。世界経済フォーラムが昨年発表した男女格差報告では、政界進出や雇用、教育機会などの男女平等の度合いを国別に比較したランキングで、日本は135ヵ国中101位。前年より3位後退した。識字率や初等、中等教育への就学はいずれも1位だが、幹部や管理職(106位)、女性国会議員の人数(102位)など、政治・経済の分野への女性の参画は、いずれも先進国の中で遅れている。